

女子部 中等科・高等科 「生活文章」

内藤優子

女子部では年間を通じて「遠足報告書」「夏休み報告書」「生活文章」「新年言志」の4種類の生活文章を書いている。「生活文章」は学校生活や寮生活を題材に自由題で書く作文である。実際に経験したことを通して考察し、感想を含めて記述する。今年度は2学期の11月20日を提出日として文章を集め、学業報告会で各学年1名ずつ発表した。その生活文章を掲載する。

「共に過ごす中で」

中等科1年 多田 陽南子

私が入学してから約8ヶ月がたった。この学園に入ってから気がついたこと、それは、学園の「人との距離」が近いことだ。人との距離が近い、これは、そのままの意味ではなく、心と心の距離のことだと私は思う。学園では、小学校までは班だったものが、家族と言う呼び名に変わり、5、6人の友と毎日一緒に生活している。寮生は寮の中で共に生活し、互いに助けあって毎日過ごしている。

私は、この学園に入り、人との関わりを意識するようになった。地方に住んでいて長期休みにしか帰ることのできない私にとって、ここは私の「居場所」の1つで、大事な場所だからだ。人との距離が近いと、人の意外な一面が見えたり、心から笑えたりと、とても楽しい。

だが最近「楽しい」だけではない別の面も感じることもある。それは、人との距離が近いと相手をよく知ることができる反面、よく知った分だけ不満を持つ部分もでてくるということだ。自分が良いと思って行ったことが、相手にとっては嫌なことだったという場合もある。例えば、自分がお料理リーダーで、時間の揃いを励ましたが、来ることが遅くなってしまった人がいた。そこで、「次からもっと早く来てほしい」と、注意すると、「あの人は怒りっぽい」と思われてしまう、などといったことだ。

では、どうすれば互いに分かり合って生活していけるだろうか。1つ、自分の本当に仲良くできる人とだけ関わっていく、という考え方もある。人には相性があるから合わない人とは距離をおき、合う人とだけ仲良くするのは、仕方ないことだ。だが、この方法で、周りと「成

長」することができるだろうか。私は、欠点を認め合い、欠点を補足していけるクラス、これが本来あるべきクラスの形だと思う。

そこで私は今のクラスの現状を改めて見つめ直してみた。今の中等科1年の長所は、明るく、個々の意見を持っている事だ。短所は集団になると集中できない事などがある。クラスの良い所をさらに伸ばし、短所を長所に変えていきたいと思う。

時には、少々自分を抑えて皆に合わせることも必要だ。しかし、人の意見ばかり気にして、自分を見失ってしまうのはさらにいけないと思う。一人一人個人の考えがあって良いし、十人十色で良いのだから。

「人との距離が近いこと」それは互いを知るよい機会になる。一人一人の人間にしっかりと寄り添って日々過ごしていけたら良いと思う。女子部して一人一人が意識していけたらよりよい女子部になると思う。まずは自分達のクラスから、身近な人から、人との関係の距離を縮めてみようと思う。

「野の花祭を通じて思った事」

中等科2年 石塚 珠英

入学してから、2度目の秋がやって来た。早くも半ばにさしかかったこの1年も、様々な学びがあったように思う。沢山、行事もあって、いろいろな経験をした。その中でも1つ、印象に残ったのは、私にとって初めての野の花祭だった。

野の花祭は、女子部生が、それぞれ考えた企画を行う、

学園祭の様なものだ。今年、私達の学年は、クラス企画として、スタンプラリーの担当になった。簡単そうな仕事で良かったな、そんな事を思いながら何もわからないままスタートした準備期間だった。

いざ準備を始めてみると、開始早々つまづくことになった。スタンプラリーの形式が「押していくうちに一つの絵になる」というタイプか、「台紙に押し集めていく」というもので、意見が分かれたのだ。私は後者の方しか思い浮かばなかったもので、クラスメートの意見の多様性に、改めて気づかされた。

結局、台紙に押し集める形式に定まり、女子部内の地図を台紙に書くことになった。そうして、やっと本格的な準備が始まったが、そこから大変だった。地図に書く、図書館などの形がわからず、学園中を周ってスケッチした。首からさげるヒモの長さが足りなくなって、応急で短いヒモに変える、なんて事もあった。また、景品のてるてるぼうずを五百個、ひたすら作り続ける作業もあって、沢山の困難を乗り越えていくうちに、いつか準備期間は終わっていた。

そして当日。野の花祭は、最高の盛り上がりだった。私達は、五ヶ所に分かれてスタンプを押すことになり、シフトが組まれた。スタンプラリーは、沢山の人が来て忙しく、午前中いっぱい働きづくしだった。

やっと仕事の時間が終わった、午後。今度は、出しものを見て回れる時間だ。仕事から解放された喜びで、有頂天になりながら、友達と共に回ろうとしていた時、クラスメイトの1人が走って来たのが見えた。「一つお願いがあって、本部の方の台紙が足りないみたいだから、印刷して届けてほしいんだけど…」そう言われて唖然とした。せっかく今から回れると思っていたのに。私の仕事ではないし、何で他の人に頼んでくれないんだろう。そこまで思って、気がついた。これは、私の仕事ではないけれど、確実に誰かがしなくてはならない仕事だ。誰もが、「自分の仕事でいいから」といって、この仕事をしなかったら、どうなるだろうか。台紙が足りなくなったら、スタンプラリーを楽しみにしていたお客様もがっかりされてしまうだろう。「わかった。やっておくよ」本部まで行くのは、大変だったし、回る時間も減ってしまったが、後悔はしていない。そしてその後、スタンプラリーは、ほぼ完売で大盛況だった。

思い返してみれば、中1の頃は、できるだけ自分の仕

事以外の責任から逃げてばかりいた。寮で決める仕事のリーダーなども、なるだけ回避していたし、日番が呼びかけるまで、クラスが騒がしくても、無視していた。でも助け合って「自治生活」している、この学園では、自分に与えられた仕事を行っているだけでは、足りないのだと気付いた。そしてそれは、ゆくゆくは社会に出て、この世界で生きてゆく為に、とても大切な学びの1つになるだろう。将来は、仕事の半分以上を、ロボットや機械が行う事になると言われている、今の時代。相手のことを考えて行動することは、人間に求められる重要な役割の1つになってくると思う。

入学してから2年目、与えられた責任をこなしているだけでは、もう許されないのではないだろうか。

「自ら育て、自らいただく」

中等科3年 西 理恵

後期に入って、私達は農芸家族になった。私にとっては初めての農芸家族である。中等科3年は今までのように、1週間の内決められた日に、クラスから順番に農芸に行くということが無くなり、半年間は一家族が責任を持って行わなければならない。また、作物を育てる時の計画を立てるのも農芸家族だ。今年の初めに農芸の先生からそのようなお話を伺っていたので、私は農芸に対して、なんとなく「面倒そうだな」とマイナスの感情を抱いていた。だから、農芸家族に決まった時は、大変な毎日が始まると思っていた。

私は昨年、1年間花壇の家族をしていたので農芸の行く機会がなく、どんな事をしてたのかを忘れていた。徐々に学校の畑に足を踏み入れると、現在中等科3年が育てているブロッコリー、人参、里芋、水菜が目に入ってきた。この日はブロッコリーについている虫取りを行うことになった。最初はなかなか見つけれず、本当にいるのだろうかとか疑問に思った。よく目をこらしてみると茎の根元や葉の裏に大小様々な虫がいることに気づいた。それからはコツつかんで虫取りをすることができた。一緒にやっていた同じ家族の人達は、いも虫を見つける度に悲鳴をあげていて、その光景が面白くて思わず笑ってしまった。叫んだり逃げたりと騒がしい労作時間だったけれど、皆で虫取りの作業を頑張ったと言う

ことに達成感があつた。ふと自分が取った虫を入れておいた箱を見ると、たくさんのいも虫がいて驚いた。だがこれだけ集まるといことは、ブロッコリーか美味しいからだなと思い、改めて無農薬の良さを感じた。

11月上旬。その日、農芸に行くと、「今日は水菜のビニールかけをするよ」と先生が言われた寒い日が続いて育ちにくくなった水菜も温かくして成長させるためだった。ただビニールをかけるだけでなく、細い棒を何本も畝をまたぐようにして差し込み、その上にビニールをかけてトンネルのような形にする作業だった。軍手をして行っても棒のとげが少し刺さってしまったり、折角かけ終わったビニールが風でめくれてしまったりと大変な事はあったが、なんとか終わらせることができた。それから1週間も経たない内に、収穫をすることになった。ビニールを取ってみると、少し前までは背が低かった水菜が立派に育っていて、やはり作物も生きているのだとはっきり知ることができた。農芸で収穫した作物は、い一度食糧部に出荷しなければならない。その為、いつなの土を丁寧に洗い流した。その時とてもみずみずしくて美味しそうだなと思った。

これらの出来事以外にも、人参の間引や一部の人参を収穫したり、里芋の収穫をしたりと苦労しつつも充実した農芸の時間を過ごしてきた。まだ農芸家族になってから1ヵ月ほどしか経っていないが、初めて知ることや気付きの連続で、初めは気が乗らなかった農芸が今では楽しく感じる。お料理の報告で「中等科3年の生産の野菜です。」と言われた時には、誇らしさと嬉しさを感じる。今後も食事時間に報告されるのを楽しみにしている。ここで忘れてはならないのが、前期の農芸家族への感謝である。私達は今、収穫の予定が詰まっているが、それは前期の人達が暑中、虫と格闘し、土まみれになって地道に育ててきてくれたからだ。家族内だけでなく、1年を通して他の家族とも協力して作物を育てる、と言うのは学園の農芸の良いところだと思う。食料自給率が低い日本の中でも、このように自分達が育て、自分達でいただくことができる環境にいられることに感謝したい。そしてこれからも日々農芸に励んでいきたい。

「自分の心の主人となって」

高等科1年 大川 由莉子

私が学園に入学してから、早くも7ヶ月が過ぎました。毎日忙しい学園生活はあっという間に過ぎていきますが、そんな日々の中で時々感じることは、全て自分次第だ、と言うことです。

入学したての頃は、仕事の多さや寮生活の細かいルールなどにとっても制限されている気がしていました。「自由」と名のつく学園なのに、どこに自由があるのか、と思っていました。

しかし、先日の読書の授業で読んだ「靴を揃えて脱ぐ自由」「はきものを揃える自由」によって考えが180度変わりました。自分が自分の心の主人となって、日々迫る小さな選択の連続を、どうするのが良いか、人間らしい行いとは何か考えて実行することが自由の行使だと、そこには書いてありました。例えば、座った椅子を元に戻すか戻さないか、机の上の消しカスを集めて捨てるか捨てないかなどです。これらの自由を行使した結果が未来の自分を作っていくことも学びました。

それまで、自由とは何の制限も受けずに、好きなことを好きなようにやることだと考えていた私は、この考え方には驚きましたが、一方でずっと腑に落ちる感覚もありました。

気になったので自由の「由」と言う漢字をその場で辞書で調べてみました。すると「そこに至る経緯、理由」と出てきました。つまり、「自由」とは自らを自らに至らせる行程や過程のことなんだ、と言葉の意味が分かり納得しました。

よく「自由には責任がつきものだ。」と言う言葉を聞きます。以前の私は、その言葉の意味を、自分が好き勝手に振る舞うことで、周りに迷惑をかけることもある、と言う風に解釈していました。しかし、新たな「自由」の考え方を知ってからは、その「責任」は周りの人に対してだけではなく、自分自身に対してもあることに気がきました。

これをきっかけに、過去の自分の選択を振り返ってみました。寮の洗濯室に放置されている洗濯物を片付けてスペースを空けたこと、急いでいて玄関に出っぱなしにしてしまった靴、更にかかのぼると、自由学園に入学したこと。これらの全ては、その時々私が選び実行したことです。そう考えると、今の自分の状況にもし不満

があっても、簡単に他人のせいにするのはとても無責任に感じます。

私が夏休みに出会ってから大切にしている言葉があります。

「起こること全てを難儀なことに思えても喜んで受け入れよ」(マルクス・アウレリウス『自省録』より)

正直、学校や寮の仕事が苦手な私は、仕事があるときの沈んだ心にこの言葉を無理やり押しつけて、諦めの言葉のように使っていました。しかし、自由について学んでから、違う意味でこの言葉が輝いて見えるようになりました。起こることは全て、これからの自分を良くするためのチャンスだから、喜んで受け入れよう、と言うように、喜んで受け入れる理由がわかったからです。

毎日訪れる選択の連続。自分のこれからを良くするのも悪くするのも自分次第。このことを胸に、自分の心の主人となって意味のある選択をしていきたいです。

「初めての委員で学んだこと」

高等科2年 田村 泰子

私は今年度の初代に、女子部に入って初めての委員を経験した。同学年の、私と同じ高等科入学の友人達には、既に委員を経験している人が多くいた。皆が仕事をしている姿を見たり、委員をしておの感想を聞いていたので、逆にその任が自分にも回ってくるのだと、誇らしいような気持ちになった。

初代の委員になる前は、自分の学年に歴代の委員がいないことや、初めての委員ということで自分の仕事をこなせるのかとても不安だった。

そうして迎えた就任の式で、私は憧れていた委員という立場になれるという期待感と、仕事や初めての寮生活が始まるという不安感の両方で心がいっぱいだった。しかし私は、せつかくの委員期間なのだから、自分が女子部にできる精一杯のことをして、2期への引き継ぎを迎えるという目標を立てた。

私に与えられた仕事は、食器と食事会計の委員だった。主な仕事内容は、女子部にある食器とお箸、スプーン、フォークなどの小器具の管理、毎日のお食事の費用と栄養の計算などである。私の1日は、朝起きて身支度をすると朝御飯をいただく前に女子部の台所に行って、その日の料理の学年が朝準備、料理共にスムーズに行えるよ

うに台所の準備をすることから始まる。晴れた日には、大芝生の向こうに朝日が昇ってくるのが見えて、とても綺麗だった。そして、普段通りに登校し、午前中の授業を受ける。授業中は、委員のことを忘れ、一女子部生に戻れた気がして嬉しかった。四単位目が終わると、急いで台所へ向かう。費用と栄養の計算などの一連の仕事を済ませて食事の席につくのはいつも黙祷後だった。そして、午後の授業を受けて、労作には台所へ行き、明日使う食器の確認などをする。解散後は、また台所へ行き、他の食の委員の仕事の手伝いをしつつ、自分の仕事もする。仕事と確認を終え、寮に帰るのは18時を過ぎることがほとんどだ。寮に帰ると、1日頑張った疲れと眠気が一気に押し寄せてくる。でも、仲の良い寮生と一緒に勉強したり、今日会ったことをお互いに話し合う時間は、とても楽しかった。そして早めに就寝して長い1日が終わる。そんな毎日は、高1の2月下旬から高2の5月中旬まで、春休みとゴールデンウィークを除く約4か月間続いた。今思い返してみると、長い委員期間の中で、完全家事や、卒業生を送る壮行会などがあり、とても忙しかったが我ながら自分なりによくやったと思う。中でも一番印象に残っているのは新入生歓迎会だ。食事に参加される方の人数が多ければ、当然使われる食器の種類や数も多く。会に向けて事前の打ち合わせが何度もあった。そしてその自分の仕事の責任に加えて高等科二年としてそのお食事の料理を担当することもあり、私は一日中台所と食堂を忙しく行き来する一日だった。それでも無事に食器や小器具をすべて配置し、暖かくおいしいお食事を出せて、会が始まると、喜びと達成感が込み上げてきた。

委員として迎えた新入生歓迎会、そして委員期間全体を通して私が最も強く感じたことは、皆が見ている所で頑張ることの大切さだ。去年自分が新入生だった頃は私たちを迎えるためにこんなにもたくさんの人達が心を込めて準備してくれていたとは想像もしていなかったので、この立場になってみて改めて、去年温かく迎えてくださった方たちに対する感謝の気持ちが芽生えた。そして、これからももっと、誰かに見られない所でもさまざまなことを精一杯頑張りたいと思った。委員で得た学びは、任期が終わり半年が経った今の生活にも繋げられていると思う。

「灰色の考え方に向き合う」

高等科3年 増田 朱莉

灰色の考え方、それは自分にとって白でも黒でもない中間色の考え方のことだ。例えば考え方を白と黒で分けると、物事は早く決定でき、簡潔でわかりやすいだろう。しかし、色は簡単に分けることが出来ても、人の考え方はそう簡単に分けることはできないと思う。女子部には白と黒のどちらでもない考えや思いを抱いている人が多くいる。そんな人たちがもし、二色しかない色で区切られた時どこに属するのだろうか。おそらく自分の考え方を横に置いて、他の二色に属するのだと思う。社会には物事を白黒ではっきり分けて決める人もいるが、そのことが女子部や清風寮という社会がよい方向に進むことにつながるのだろうか。私はよい社会に繋がるとは思わない。

このように考えたきっかけは二つある。それは、高等科三年になり関心を持つという言葉をよく耳にするようになったからということと、自分たちの周りの環境に向き合う機会が増えたからということだ。時にあまり触れたくない問題に向き合い、クラスで話し合う中で灰色の考え方に向きあうことの大切さと難しさを学んだ。今の生活をよりよくしたいと皆で考える時間は初めの目的から少し焦点がずれることもある。しかし、クラスで時々の互いの状況を伝え、皆が気に懸けあいながら生活することで、私自身が本当に身の周りのことについて関心があるのかどうかを振り返る時間にもなった。そして、人が求めていることを想像できるようになった。ただ相

手を注意することや口だけの呼びかけではなくて、一つの行動や発言の裏側には何があるのかを察して、声を掛けることが必要だと感じた。また、問題に向き合えない人など、さまざまな色を持つ人が集まっているということを変えて理解して初めて互いを尊重できる

このように考えることが、灰色の考え方を大切にすることに繋がるのだと思う。

しかし今の生活は、女子部で生活している人全員が数人を頼りすぎていると思う。また私たち高等科三年生は最高学年になるにあたって、高等科二年生の修養会で話してきた理想を見失っているように感じる。一人一人を尊重することを大切にすあまり、尊重という言葉の陰で、何を軸としていたのか分からなくなっている気がする。これは同級生や下級生の目線、周りはどう動いているかが気になっているからだと思う。自分は思うのか、どう行動するとよいと考えるのか、ということから離れてしまい、行動に移した後人にどう思われるのかまで考えてしまう。本当に大切にしていたものは何なのか、何度も何度も振り返って、皆と息を吐きたい。そして、今一度客観的になって物事を見ることが出来る余裕を持ちたい。

女子部での生活も残り約四か月。毎日の新鮮で新たな気付きからたくさんのことを吸収し、卒業した後、個人の色を大切にでき、社会に発信していけるような人になりたい。そして卒業したら長い間会うことができなくなるかもしれない人との今の時間も大切に、残された時を過ごしたい。